

産学連携実践型ゼミナール活動における社会人（基礎）力形成に向けての取り組み

—ソーシャルメディアを利用した実践型ゼミナールの試み—

**About a match for Industry-university cooperation hands-on seminar activities
member of society formation of (basic) skills.**

— Try of the practice type seminar for which social media were used —

秋吉 浩志

Koji Akiyoshi

【要 約】

本稿では、前稿、前々稿に引き続き、社会人基礎力、ならびに入社後の人材を育成する即戦力的な人材育成までもが大学のような高等教育機関には望まれることとなった大学の教育ありかたについての一試論を述べる。今回はアクティブラーニングのように、学修者の能動的な学修への参加を取り入れる方法も導入され、その中で学外ゼミナール活動、社会貢献、地域貢献など、社会に目を向けた活動が注目を浴びるようになった。そこでは、実践的なモデルを提示し、学生にどのような効果が求められるかが、提示される。

その実践的な教育方法が求められているなか、その試みの一つとして、経済産業省の社会人基礎力モデルを引用しながら、九州情報大学のマーケティングゼミナールにおいて「産学連携実践型ゼミナール」の運営を通じてどのように社会人基礎力、人間力を養成するのかの試みについて、前回同様本年度（2014年度）の取り組みを中心としてその活動の報告並びに今後の課題や問題点について述べたいと思う。その中で重要なことは前稿も強調したが、一般的なインターンシップのような社会人基礎力、応用力等を養成するだけでなく、産学連携のもと、主に企業や団体、組織との産学連携した産学連携事業型としてのゼミナール活動のなかで社会人力と学力とを同時に養成をする試みの重要性が徐々にあらわれてきているように思われる。

キーワード: 産学連携、社会人基礎力、人間力、キャリア形成、インターンシップ、ゼミナール、アクティブラーニング、ソーシャルメディア、ソーシャルメディアミックス、マーケティング

1 はじめに

九州情報大学では特徴ある授業の取り組みがなされている。各初年次教育、税理士資格を得るための資格取得から、高度専門教育への移行、各種キャリア教育、最近注目を集めているプロジェ

クト型教育法など、大きな変化を迎え、さまざまなカリキュラムの特性を出し始めている。

しかし、それらも卒業時には社会にある程度即時対応できる「社会人基礎力」がなければ、就職率にも繋がらず、就職後の離職率も高くなる可能性も大きい。

今回は社会人基礎力を養うための取り組みのひとつとして、本学のマーケティングゼミナールを通じての取り組み「産学連携実践型ゼミナール活動」（以降ゼミナールをゼミに省略）の取り組みについて、引き続き2015年度1年間の取り組みを報告させていただきたい。

とくに企業や各種組織などのマーケティング戦略を練り、ソーシャルメディアを活用した、マーケティング活動をゼミが請け負いながら活動することによって、社会から教わる社会人基礎力を養うという目的のもとに、経済産業省が2007年提示した「社会人基礎力」を参考にしながら、今回はゼミ活動を行った。

その報告の前に、本ゼミでも参考にさせていただいた、他大学での先進的な取り組みについてふたつほど紹介しながら、ゼミの取り組みについて若干説明したい。

2 各大学での社会人基礎力養成への取り組み例

(1) 武蔵野大学の「産学連携ゼミ」

<http://www.musashino->

u.ac.jp/career_international/grow_up/07.html

3・4年次の2年間、企業・自治体等と連携し、学科横断のゼミ形式の授業と、連携先での長期インターンシップを実施するのが「産学連携ゼミ」。理論と実践を有機的に構成した教育プログラム。

各学科での専攻（メジャー）に加え、もう一つの副専攻（サブメジャー）という位置付けで、学部を超えて、関心のあるゼミに参加することができるという特徴がある。産業界側のニーズを取り入れながら、大学と企業・自治体による協働開発で教育プログラムを構築していくのが最大の特長である。現在6つのプロジェクトが進行中である。

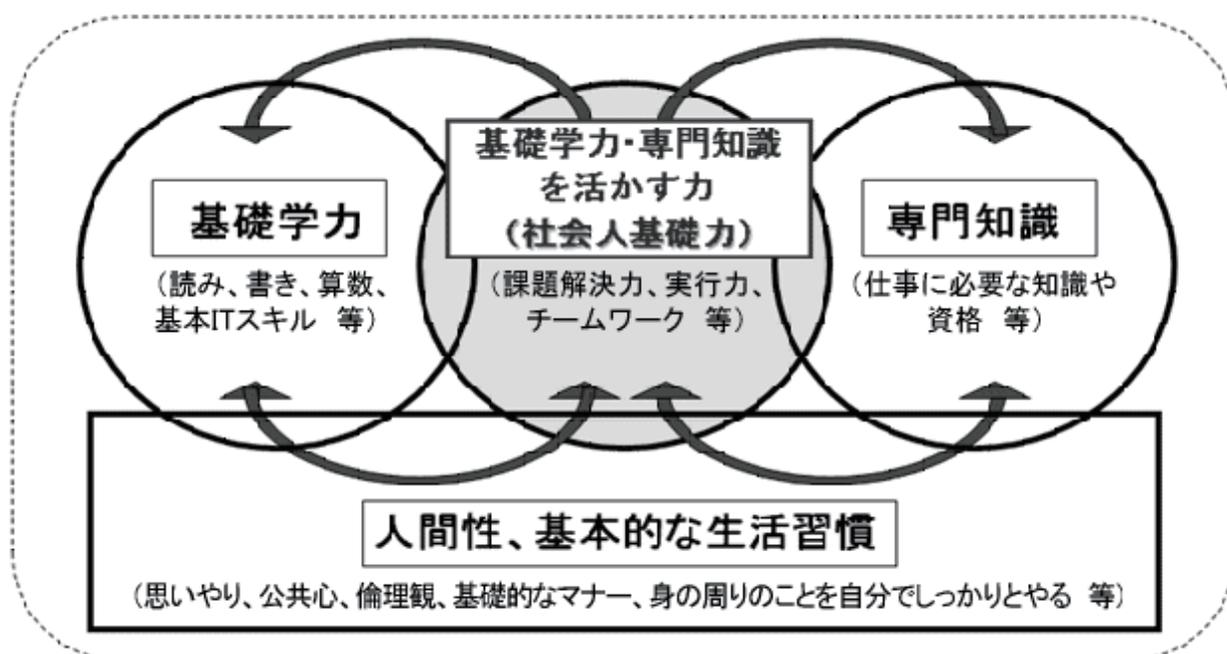
(2) 「3Dプロジェクト」(法政大学)

<http://3dep.hosei.ac.jp/about/3d/> (以下HPを抜粋)

法政大学の「産学連携3D教育プロジェクト」では、従来の教員による学生の教育・指導に、産業界の知見やニーズを反映した教育手法を組み合わせることによって、4年間の教育を「立体的に」展開。

そこで3つのベクトルを示している。

図表1：社会人基礎力の概念



出典：経済産業省 HP;<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>

①第 1 のベクトル:「働く力を理解する講座・科目群」であり、ここでは、大学オリジナルの映像教材を使用しながら、社会で働くときに何が求められるかを、実感を持って学ぶことができるよう工夫している。

②第 2 のベクトル:「新しい形のインターンシップ」による実践。従来の企業で研修を受けるインターンシップではなく、学生たちが実際にビジネスを体験することで自らの力を試し、実践から意欲や気づきを得る機会を設定。

③第 3 のベクトル:法政大学が独自に開発した「働く力測定アセスメント」によって、学んだことの成果を振り返り、成長を確かめながら、さらに学びを深めていく。

この 3 つのベクトルを組み合わせることにより、学生のキャリア観や、将来にわたって役立つ「働くチカラ」を育てる。

しかし、ここではビジョンを持った個人個人のマネージメント力等については触れていない。そのあたりも視野において活動推進を考える余地がありそうである。

(3) 本学の産学連携実践型ゼミとは

そして、本学のマーケティング論ゼミで行っている「産学連携実践型ゼミ」、その目的は「企業や組織と大学ゼミが連携して企業や組織の機能・事業の一部を請け負ってより社会人=企業人・組織人の育成を行うというものである。どちらかという与企业で行っている長期 OJT=On the Job Training=長期の仕事、仕事遂行を通して訓練をすることに近いものであろう。

そしてそこにおいて、

①実際にビジネスを体験することで自らの力を試し、実践から意欲や気づきを得る機会を設ける。

②上記の経験の中で必要な学力などは、研究書などの専門書などで研究しながら向上させる。

③就職後の人生設計(健康管理も含む)を考える力も身に付ける など

そこにおいてもっとも重要なことは週 1 回以上、約 1 年間の実践型ゼミであるといえよう。1 年間を一区切りとして、とくにビジネス、とくに

事業実践的なマーケティングスキルしっかりと身につけることができる程度できるメリットがある。

(注:「事業」・・・生産・営利などの一定の目的を持って継続的に、組織・会社・商店などを経営する仕事)

本学のマーケティング論ゼミでは、上記の 3 つの柱を中心に 1 年間活動を行ってきた。

3、社会人基礎力とは

さて、ここで経済産業省が提示している「社会人基礎力」について簡単に触れたい。

提示されている能力は、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の 3 つの能力(12 の能力要素)から構成されている。

「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、経済産業省が 2006 年から提唱された。

企業や若者を取り巻く環境変化により、「基礎学力」「専門知識」に加え、それらをうまく活用していくための「社会人基礎力」を意識的に育成していくことが今まで以上に重要となってきたためであると示している。本ゼミではこの力をどれだけ習得できるかを目的として運営している。

そして、その概念図は、**図表 1** のように提示されている。

4、本年度マーケティングゼミにおける産学連携ゼミの本学における取り組み例

これまで、各大学の事例や経済産業省の示している社会人基礎力の可能性、有効性について述べてきたが、それを踏まえ、ここからは本学マーケティング論ゼミが実際事業の一部として活動している企業との事例を上げ、その内容について説明したい。

前稿でも述べたが、本学のマーケティングゼミでは、ソーシャルメディアを利用したマーケティング戦略を検討し、組織として運営している数社や組織とインターネットクラウドの USTREAM 生放送等の産学連携プロジェクトを行っている。

図表2：社会人基礎力3つの力と12の要素

分類	能力要素	内容
前に踏み出す力 (アクション)	主体性	物事に進んで取り組む力 例) 指示を待つのではなく、自らやるべきことを見つけて積極的に取り組む。
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力 例) 「やるうじゃないか」と呼びかけ、目的に向かって周囲の人々を動かしていく。
	実行力	目的を設定し確実に行動する力 例) 言われたことをやるだけでなく自ら目標を設定し、失敗を恐れず行動に移し、粘り強く取り組む。
考え抜く力 (シンキング)	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力 例) 目標に向かって、自ら「ここに問題があり、解決が必要だ」と提案する。
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力 例) 課題の解決に向けた複数のプロセスを明確にし、「その中で最善のものは何か」を検討し、それに向けた準備をする。
	創造力	新しい価値を生み出す力 例) 既存の発想にとらわれず、課題に対して新しい解決方法を考える。
チームで働く力 (チームワーク)	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力 例) 自分の意見をわかりやすく整理した上で、相手に理解してもらうように的確に伝える。
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力 例) 相手の話しやすい環境をつくり、適切なタイミングで質問するなど相手の意見を引き出す。
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力 例) 自分のルールややり方に固執するのではなく、相手の意見や立場を尊重し理解する。
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力 例) チームで仕事をするとき、自分がどのような役割を果たすべきかを理解する。
	規律性	社会のルールや人の約束を守る力 例) 状況に応じて、社会のルールに則って自らの発言や行動を適切に律する。
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力 例) ストレスを感じることがあっても、成長の機会だとポジティブに捉えて肩の力を抜いて対応する。

出典：経済産業省『企業の「求める人材像」2007
－社会人基礎力との関係－』2ページ。

(1) 株式会社フラウとの USTREAM 放送

株式会社フラウは1993年創業、2014年21年目になる子育て支援情報提供を中心とした、主婦向け雑誌「ずぶれでCHA・CHA・CHA」など多くの子育て支援関係の雑誌や本を出版している企業である。

その企業のマーケティング戦略の中でのソーシャルメディア事業の一環として、USTREAM放送の番組企画・制作等をゼミで、引き受け、番組表作りなど放送関係の作業をすべてゼミ学生が行っている。

また、企業側の担当者とも学生が積極的にコミュニケーションをとり、定期的に各種ソーシャルメディアをどのように利用するか、特に複合的に各種メディアをミックスさせてプロモーションを行うかの担当者会議を月1回行い、積極的な番組作りを行っている。また、生放送を録画したものを動画サイト You Tube にも定期的にアップロードしている。

(2) ゼミ内での具体的作業について

①放送前について

放送前は各種準備を行っている。具体的には、放送機材の準備、ダンドリ作業（出演者、ゲスト、大学外オペレーションスタッフ）、番組進行表作成、オペレーション準備（リハーサル）など。

②放送中について

放送中は、もちろん機材等オペレーションの進行、報告書の作成、記録用の写真撮影など。

③放送後について

その日、終了後に反省会、後日報告書&レポート提出、ソーシャルメディアを利用するマーケティング戦略の計画を作成などである。

さらに PDCA（注：事業活動における生産管理や品質管理などの管理業務を円滑に進める手法の一つであり、Plan（計画）→ Do

（実行）→ Check（評価）→ Act（改善）の4段階を繰り返すことによって、業務を継続的に改善すること）サイクルの概念を植え付け、必ず過去の放送の反省から、次回に生かすように各自努力している。

5、この1年間の活動を通じて

さて、前節では、具体的な活動内容について述べてきた。この1年間を通じて、社会人基礎力に関する3つの力とそれにそうように作られた12の要素に照らし合わせながら、どのような行動ならびに結果になったかを簡単に説明したい。

(1) 社会人基礎力を形成する3つの力について

社会人基礎力の3つの力とその12の要素は図表2のように経済産業省は提示している。

その力と照らし合わせて、今回の結果を考察してみた。

①前に踏み出す力 **Action** (アクション) : 失敗しても粘り強く取り組む力

1)主体性:物事に進んで取り込む力;社会人から学ぶことによって主体性の強さは若干出てきたように思われる。しかし、指示待ち状態はあまり変化がなかった。

2)働きかけ力:他人に働きかけ、巻き込む力:ゼミ1、2歴代の卒業生の先輩から後輩へのはたらきかけが積極的にあり、そのように先輩後輩関係で巻き込む力をつけることはできた。

3)実行力:目的を設定し確実に行動する力:放送や動画を作成するのを確実に行うミッションのみ達成が達成できたが、もっとも重要である、マーケティング戦略の設定や分析や解析をする段階にまで進めることはできなかった。

このあたりが大きな課題である。

②考え抜く力 **Thinking** (シンキング) : 問題意識をもち考え抜く力

1)課題発見力:現状を分析し目的や課題を明らかにする力:これも全くの指示待ち状態であり、教員が反省会にて指摘しない限り、学生同士で発見することはできなかった。

2)計画力:課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力:放送終了後の反省会にてその点を毎回教員の方から指摘してきたが、同じミスをなんども繰り返す学生もいた。これからの大きな課題である。

3)創造力:新しい価値を生み出す力:新しい発想などを学生に働きかけ、その新しい価値の出現を期待したが、一度もそのような状況にはならなかった。

これも今後の大きな課題になるであろう。

③チームで働く力 **Teamwork** (チームワーク) : 目標に向けて他人と協力する力

1)発信力:自分の意見をわかりやすく伝える力:この1年間カリキュラムの内容や勉強、仕事の所作について、必ず学生の先輩後輩間で段取りを指示することを学生同士で検討をするようになった。

2)傾聴力:相手の意見を丁寧に聴く力:社会人や教員から指摘をうけながら、その力をつけていった。

3)柔軟性:意見の違いや立場の違いを理解する力:これらは礼儀作法等の指示をつねに行ってきたが、学生に浸透しているかどうかは、感想でしかわからない。

4)状況把握力:自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力:この力も今回結果として出てきたかどうかは判断できない状況である。

5)規律性:社会のルールや人との約束を守る力:放送時間やスタッフの役割分担を明確にすることで、実行可能になっている。

さらには責任感も生まれ、その状況変化がけっこう出てきているように思われる。

6)ストレスコントロール力:ストレスの発生源に対応する力:回復力(レジレンス力)にも注意を払ってきた。本や社会人からのアドバイスなどを有効に活用して、心のコントロール力がある程度身につけたと思われる。

(2) 社会人基礎力とその要素に対するの効果と課題

主に今回の活動においてこの一年間の目標は以下のように置いていた。とくに本学の学生の特徴、ならびに成長が必要なものを考慮して目標を立てていた。

①ダンドリ力の育成(体系的な思考経験) ②コミュニケーション力の強化③報告書・レポート等文章作成力(卒論への文章力育成) ④グループ会議(コンペディション) ⑤資料作成&専門書を読むくせ(きっかけ)をつける⑥社会人と接して、強い心をつくる。⑦話す力を養う(説明能力等)

しかし、上記の全ての底上げができるか、とくに本年度は上記を行うためのオリジナルの環境づくりと仕事におけるオペレーションシステム構築を主に行った。

6、おわりに

今回のその12の対応力をこの試みに合わせた結果以下のような問題点が表面化してきたと思われる。

●学生に関して、

①基本的指示待ち状態である

②コミュニケーション力が不足

- ③ダンドリ力が皆無に近い
- ④積極的な報告・連絡・相談がない
- ⑤文章力がない(報告書・レポート提出状況を見て)

●学生自身の多くの性向について

- ⑥プライドが高いが、心(メンタル)が弱い
 - ⑦ライフプランニング力(将来を考える力)がない
- など

上記のような問題がとくに目立ったように思われる。

また、これからの目標としては、

- ①他大学&専門学校(クリエイター)との連携をはかり、より学生同士の交流をすすめること。

たとえば、昨年、博多どんたくでの博多女子高校放送部との連携作業(You Tube 掲載動画撮影&公開:昨年5月3日、4日実施)のような他学との交流を積極的にすすめる。

- ②アクティブラーニングとの関わり。

来年度の実践目標の明確化し、目標は、継続性のある「学内ベンチャー企業」まで育てられたら、本当の「事業型」になるであろう。

そして、最後に

- ③医療分野などから浸透してきている概念の「セルフマネジメント」をできる力「セルフブランディング力」などをつける力を育てないといけなことが明確になった。

以上3点に絞って説明したが、今後も上記のことにも限らず、従来の問題を踏まえつつ、新たな学生の問題点が出てきた場合の即座に対応できるようなシステム作りが必要ではないかと思われる。

謝辞

今回の研究ノート作成において、株式会社フラウの皆様のご協力を得て作成することができた。厚く御礼申し上げたい。

参考文献

- 1) 秋吉浩志『産学連携型ゼミナール活動におけるキャリア形成に向けての取り組みⅡ—ソーシャルメディアを利用した「アクティブラーニ

ング」への試みに向けて—』九州情報大学研究紀要、第17巻、2015年。

- 2) 荒井 誠、野口孝文、草苺敏夫、高橋剛、梶原秀一、千田和範、森太郎、大槻香子『産学連携による実践型人材育成事業の成果と今後』釧路工業高等専門学校紀要 44、5-8、2010年。
- 3) 奥山雅則『実践的研究教育としてのインターンシップの取り組み』大阪大学、工学教育、54(3)、128-131、2010年。
- 4) 河合塾『大学のアクティブラーニング調査報告書』2010年度。
- 5) 北岡康夫、森勇介、根岸和政『産学連携による社会人基礎力の育成』工学、工業教育研究講演会講演論文集、平成20年度、738-739、2008年。
- 6) 新國三千代『社会情報学部によるプロジェクトタイプの実践型インターンシップの試み』社会情報、16巻1号、101-106、2006年。
- 7) 末岡英利『大学教育と産学連携による人材育成—寄付講座活動の果たしてきた役割とこれから』日本船舶海洋工学会誌 (47)、38-41、2013年。
- 8) 長谷博行、高橋謙三、鈴木敏男『産学連携による長期インターンシップの教育的効果:福井大学工学研究科における産学連携による実践型人材育成事業』工学・工業教育研究講演会講演論文集、112-113、2009年。
- 9) 竹中啓之『インターンシップと大学教育』鹿児島県立大学、商経論叢、第50号、17-35、2000年。